機殿君谷起

全

原田繊維文庫
文庫4
949

文庫
949

昭和三十年十月二十九日
第一商学部より移管

京都帝国大学図書

御機殿畧起閲焉實衣服之
恩頼誰不仰之哉況爲諭帰
児至以畢言之之所載國史
官牒也見者詳諸矣

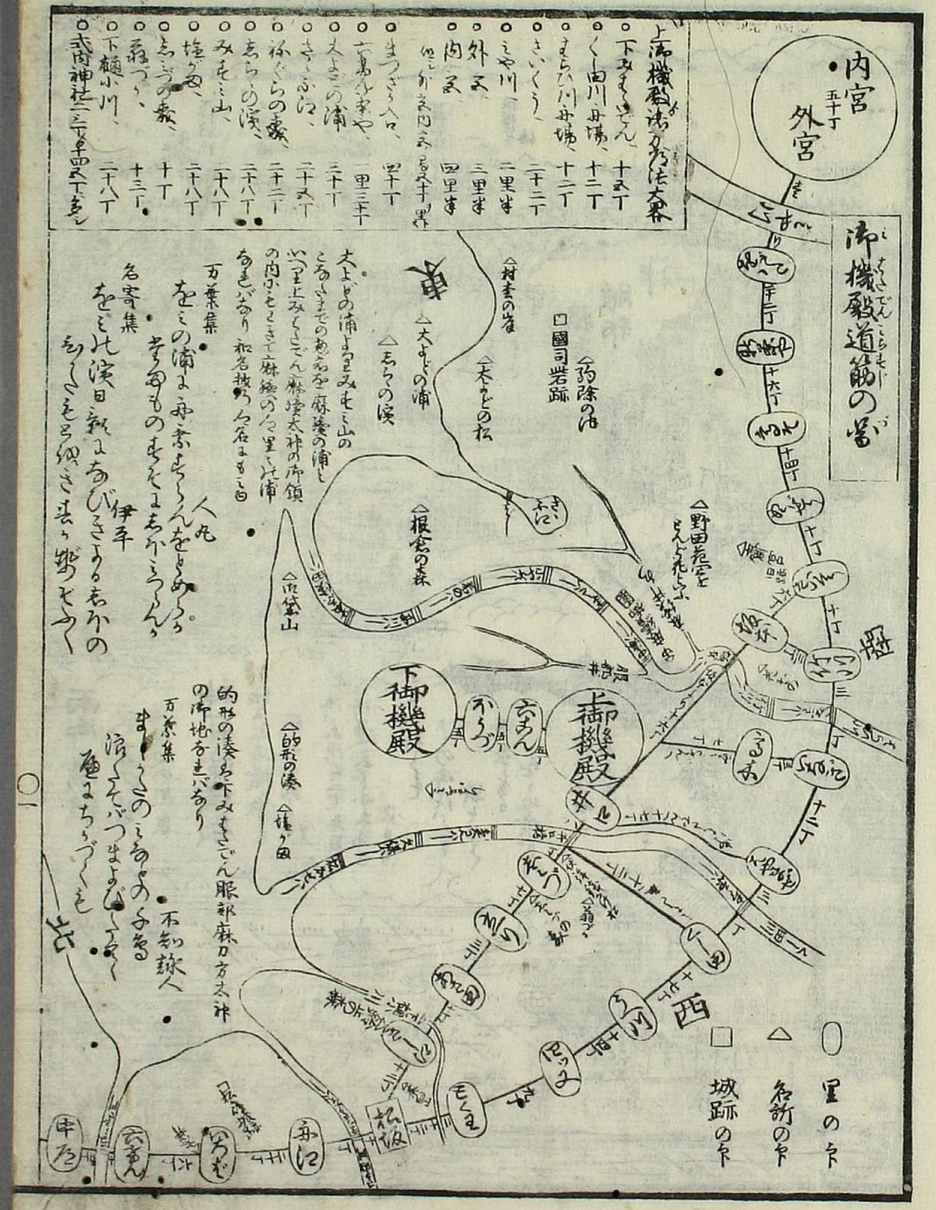
天保六年三月

皇太神宮權祢宜正四位荒木田神主經

原田繼經文庫

衣服大祖

△御機殿鎮座の年代猶遷幸の次第等を御機殿の旧記に譲りて爰に省く御衣祭の行事を御機殿年中行事記及御衣祭行事記其餘の故事を内宮両機殿勘例同雑事考證等を総考して其事實をさとしまべし況機殿儀式帳を世に其名高く諸書に引證せくるべしとぞ婦女兒童に通ずるの道遠き浅憂今此俗書を編せし此書を唯衣服の祖神の御徳と賤女山夫まぐるに諭さんとて是とまるのくちすさびバ文のつゝ句くゝ言葉のいやしきを見人用捨〳〵ゆゑ〳〵



麻績大神宮
服部伊勢神社
流田上神社
須賀御霊神社
東宮殿
西宮殿
東八重神社
西八重神社
石見神社
直会殿
神都殿
第十六編

兩河機殿
麻績の里
神麻績機殿
服部神社
服大神宮
畠田神社
國乃御神社
具名胡神社
佐佐栗柄神社
竹佐多二神社
須屋神社
天香山神社
仲神社
下馬所
一の鳥居

麻績遐公久成頭書
機殿儀式帳云響向
珠城朝廷
倭姫皇女供奉太
神齋奉飯野之高
宮干時機殿立長
田郷是處立社號
麻績社亦名河崎
社是大神御霊也
祢麻績屋姫神干
後機殿遷岸村是
處立社号稱岸社
ヱ久成案ズルニ
機殿儀式帳ハ桓
武延暦年中内宮
儀式帳及外宮儀
式帳等ト俱ニ上
奏ノ書也故神宮
雜例集御機殿御
政印ノ条ノ宣旨
ニ至干當機殿印
亟延暦式正文神
部等氏文機殿古
次汰文
書トア
ル即是
也権祢
宜荒木
田末壽ノ雜例頭
書ニモ延暦式ト
ハ機殿儀式帳ヲ
云也ト又平田篤
胤ノ古史徴ニ氏
文トハ元祖ヨリ
ノ系譜ニ代々ノ
事蹟ヲ記セルモ
ノヲトヱレタル
倶以ナルヽナリ
猶機殿儀式帳ノ
事ハ元祿十二年
薗田長宮守洪卿
ノ内宮兩機殿勘
例享保六年中川
長宮經晃卿ノ兩
機殿雜事考證及
中川二祢宜三位

上御機殿

麻績太神宮

○正殿一座　麻績屋姫命

○御織殿六座

稚日女命
拷幡千々姫命
長白羽神
天羽槌雄命
天棚機姫命
木花開耶姫命

○東寶殿　○西寶殿

○稚産靈神社　○三狐神社

○四宮　○土宮　○奏社　○寅宮

○麻績機殿ハ擂田川と後川との間往還より左の方十二丁を經て飯野郡井手郷にあり俗に上御機殿とも上御館とも御糸宮とも麻姫宮とも荒妙宮とも倭文宮ともいへり其外殿舎等のことは略もくもくに記すハ宮中指記に見えたり

〈三祭禮　○正月十六日後世十五日　○六月十六日　○九月十六日

〈御衣祭　○四月朔より十四日まで　○九月朔より十四日まで

又七月廿一日遠近の老若群參て角力の事ありて是古記に載る神事なるあるべしの頃もりや其濫觴をもとめ其外月々の小祀等年中行事記に讓りて略す

下御機殿

太神宮

○正殿二座　八千々姫命　天御桙命

○御織殿六座　祭神上御機殿同

○東寶殿　○西寶殿

○稚産靈神社　○笛宮

○四宮　○奏社　○寅宮

○石神社

○服機殿ハ麻績機殿より丑の方行程十五丁を過て多氣郡流田郷にあり俗に下御館とも下御機殿とも又服宮とも和妙宮とも其外宮中の事も上御機殿に同じ

〈三祭禮　○正月十四日　○七月十九日　○九月十九日

〈御衣祭　上御機殿に同じ

然の小祀も年中行事記に讓りて省さぬ

太神宮兩御機殿通俗畧記

伊勢國御糸郡民河野某謹白

衣食住の三ツ人間生業の大基なり衣服の御祖神なる麻績服部の忌御機殿なる則上御機殿ハ麻績太神宮下ツ殿ハ神衣として永むやふる神代のむかし天原の齋機殿ひく織織の業を始させ給へるより以来今ハ毎年四月の八日より天照太神乃御衣織ハ十四日より始りて忌大神部以下此神部織女人西幸おのく繕奉りて内宮ハ荒妙和妙の御衣と称し奉る此日先駈の役人御先を拂ひて荒川ハ迄る時三員の荒川大文司権大文司出文司を皆荒川まで御迎ハ出奉りおひく御衣を捧ゝ御殿の御醫と忌小政所の御被あり文ハ忌まる検非遠使等路次乃

麻績郡井手郷ニ在之由記文雖載之多氣郡之於内者麻績郷在之而井手郷者無之トアリ即和名抄多氣郡郷名麻績ニ延喜式多氣郡麻績神社服部麻乃方神社ニ麻績機殿ハ右ニ記スカ如ク天照皇大神内宮ニ御鎮座ノ已前長田郷ニ經營ヨリ今ノ宮所井手里ニ遷幸マデ其次第粗雖明眼機殿ノ二ハ儀式帳分明ナラズ唯或ニ三書ニ雖在載今爰ニ畧又委クハ御機殿目録但言ニ辨スベシ總テ麻績服部兩

此事を掛かめ三司以下おのく供奉ありて御衣の内宮より若御殿の祖廟の宮人出迎ひ荒川長官神主方諸内人御機殿神部以下悉く参ひおひく御衣太進の儀式あり其大概先河原後次ハ御塩湯大麻物事次ハ五串所讀合式あり廣前ハ進むなり先御機殿の大神部進み出て自御衣を廣前の高案ハ結へく奉洗あとハ大宮司進み出おく祝詞を讀進一ツ文ハ五串物事なり三ツ武御つて長官神主方東寶殿上階ありて御衣を殿内ハ納め奉則御饗の御衣祭して衣被の根元の祭りてあるべしハ勅使も立ちひおく太神宮乃最大祭なり一かし今の結人ハ五つまくる衣被大祭の源を発ひ御衣祭ハ御機殿ハ太神宮の御戸張を織おく上ハ当ひ習ハ一美さるこゝの

御機殿ノ丁ハ古事記日本紀旧事紀神祇令延喜式三代實録古語拾遺續日本紀内宮儀式帳外宮儀式帳機殿儀式帳内宮建久年中行事記内宮元文年中行事記神宮雜例集神宮諸雜事記神鳳抄百練抄公文抄和名抄伊勢風土記公事根源集新撰姓氏録公卿補任類聚大補任朝野群載公文筆海仁治遷宮記嘉元遷宮記神事供奉記等ノ古書ニ詳也某々ノ文儀ハ旧事俚言ニ挙テ其註解ヲカフベシ又祠官ノ

やうよ四海一族をまつあるまつりごとの始なる次第なり

御衣祭と申奉るは天照大神の御衣を織奉る始の御衣祭と書る文字かく則御衣のことなりさきハ御衣祭と申奉るもいつこなきハ眼前なる事なれ紙を用て其事をまつまべし時々つく今衆人吳服の所よりかくしいへども流石神の御織をつぐ神宮の祭礼始潔八日より十四日の西日を陸奥絹の果までも織縫紡績を悲む故実を修へしと也編ま衣園を重んぜるの形像實神祖の聲音流例なるべし如是正き大祭ありていかを衣服大祖の御裔なるゆゑ中かも

麻績太神を麻姫命とも麻績屋姫命とも称し奉る

ノ新撰姓氏録神服連天御中主命十一世孫天御桙命之後也神麻績連天物知命之後也又旧事紀天八坂彦命伊勢神麻績連之祖也又古語拾遺長白羽神伊勢國麻績祖也予祖者所載國史如是雖如區々天物知天八坂彦長白羽三名俱以一神之異称也今平田氏ノ神代系圖ニモ分ニヘリ又三代實録豊城入彦命之後也是等ノ丁モ悉旧事俚言ニ註スベシ猶代々ノ系族ノ粗國史官牒以下ニ見エタルハ

婦人の古護神かして殊更万民衣服の道を造り始御祖を始めさせ給へるもさきハ下流の今よりまで衣を織時の号

麻姫乃命

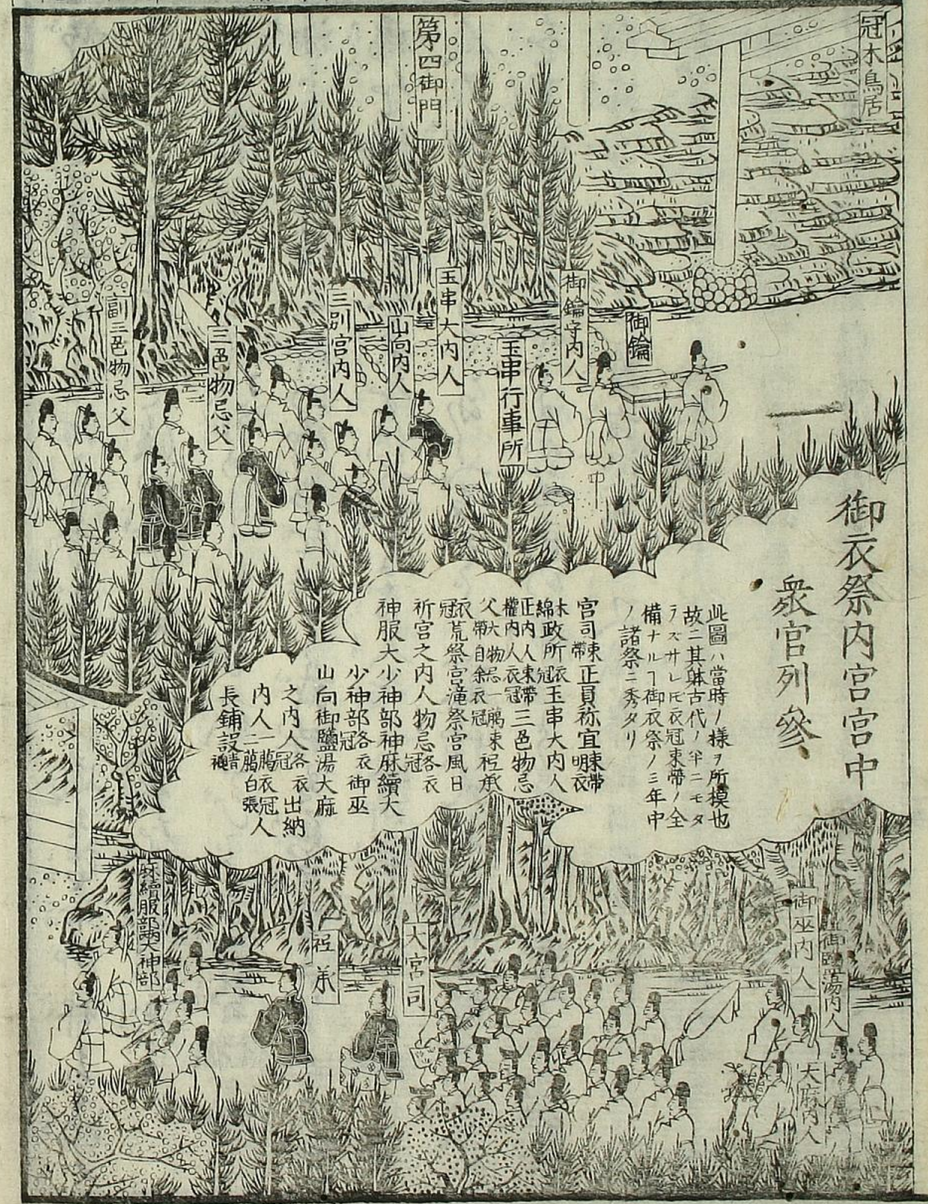
神めしかく衣織くびでかを繁増の邪と

麻績太神の御恩を深し裁時を恵日のさかりなく祝て

福を得るとの故実を修へ今よりまで指よ此御号を記し結るし皆人の知る所かくいかへるまで

麻績太神の授させ給へる麻布を万よ用ひ賤きもかを万民の常衣ともせしてしめく今以絹入織布子しいつるを其古語なり又懸幕帷昼夜ともの新よりまでもべく今布かく制衣へざるものも幅をあハせうるを三布四布と唱へ衣服かを麻織の称ありこの外布ようは解てけ或布目のまろめなどいひまて絹をを縫布赤絹をを絹布しいひ又紙搖かく織ようを

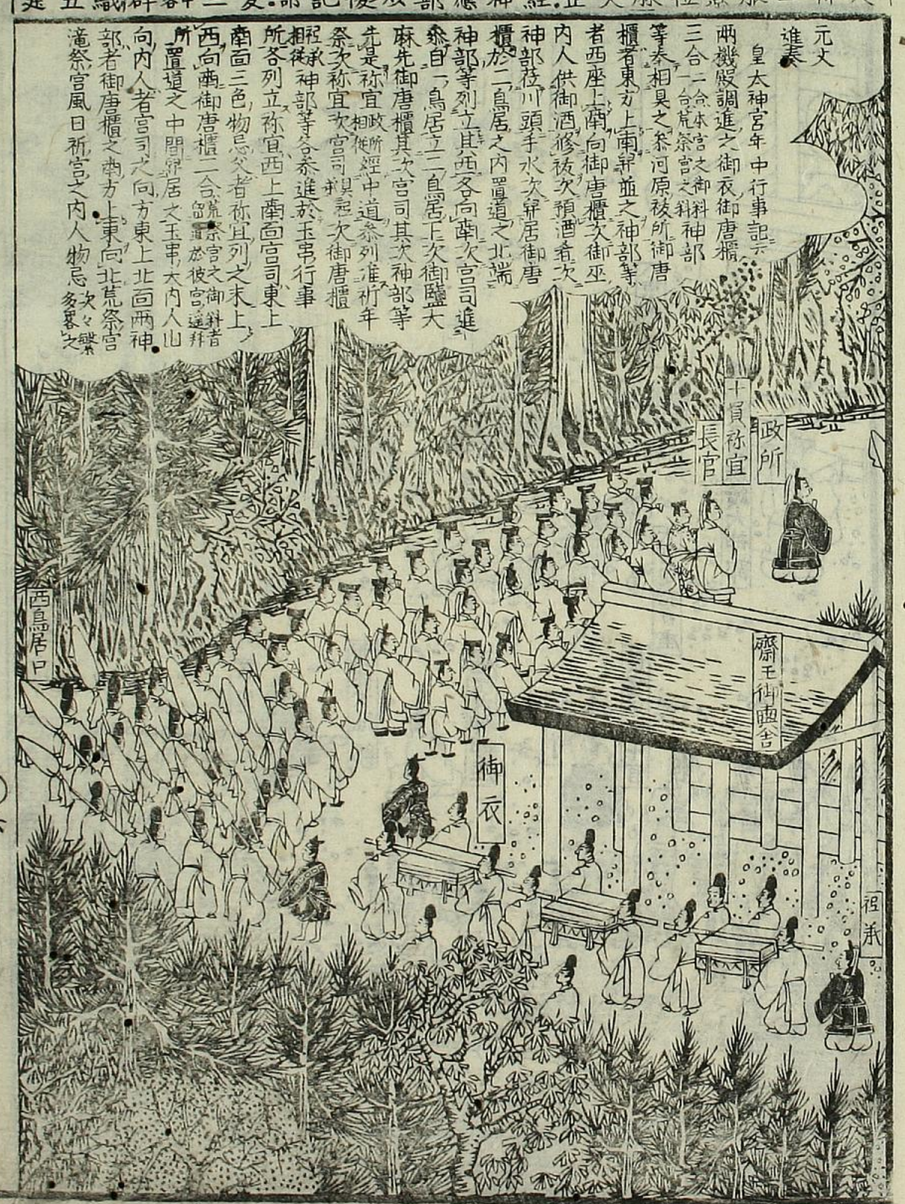
日本紀崇神卷伊勢麻續君天武卷三位麻續王三代實錄中麻續公憲麻呂同書麻續部黃永内宮儀式帳神服織神麻續内人同書孝德御宇麻續連廣背同書桓武御宇麻續部春子又麻續部倭人外宮儀式帳正月朔日例服織麻續神部同書五月五日例服織麻續神部又九月例神服織神部神麻續神部萬葉集麻續王又神麻續部島麿又若麻續部諸人又若麻續部羊神祇令神服部麻續連延喜式服部氏麻續氏同祝



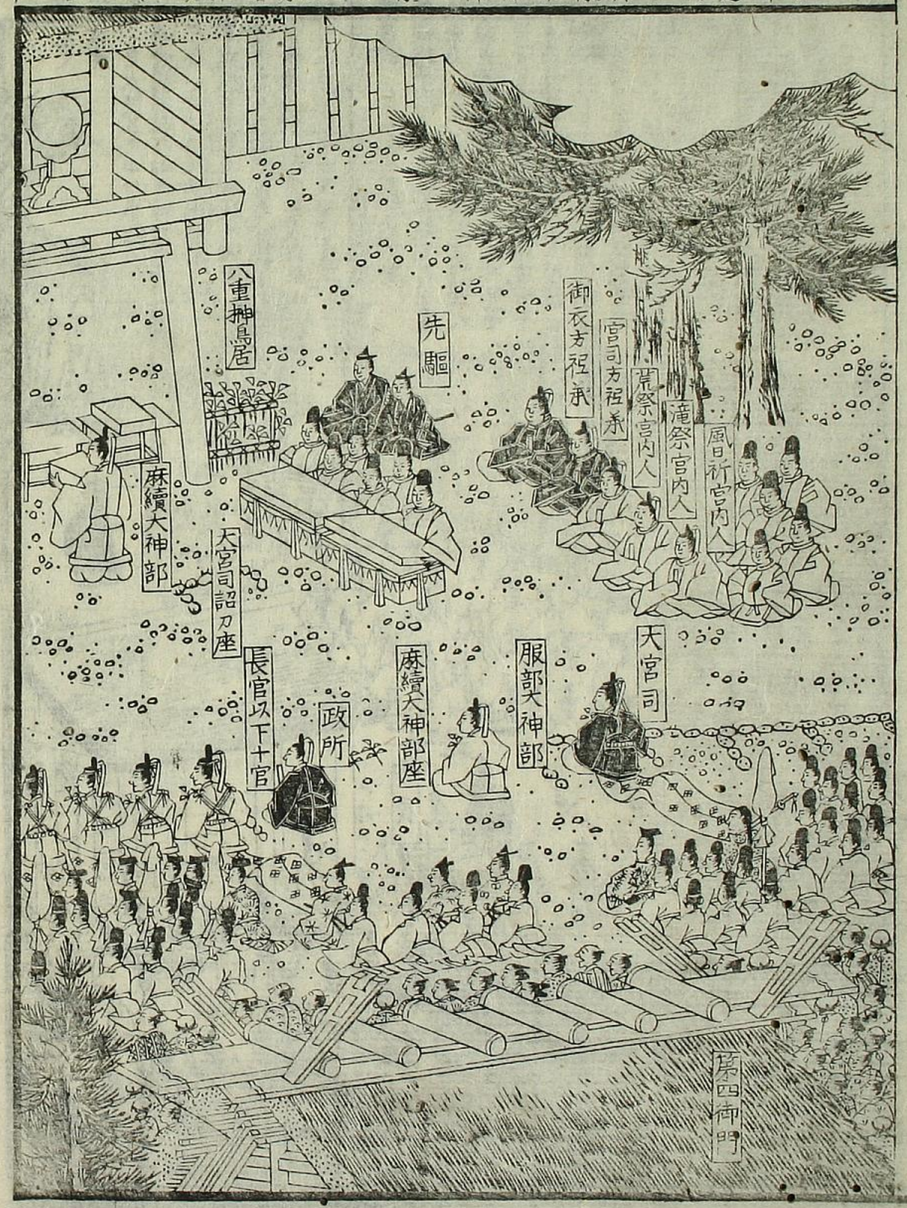
詞服織麻續乃人等乃公事根源神服麻續連大宝二年紀麻續豊足服部連佐射神護景雲三年紀正六位上神麻續連足麻呂神宮雜例集大神部近春同書正暦年中氏人興經同書寛弘年中神部近守同書嘉應二年位署大神部神服連公道尚公神部神服連公俊正神宮諸雜事記天喜五年大神部重友少神部兼友公卿補任治承三年神部正五位下中神服麻續朝野群載永暦四年服織殿神部又康和五年麻續少神部建

元文進表

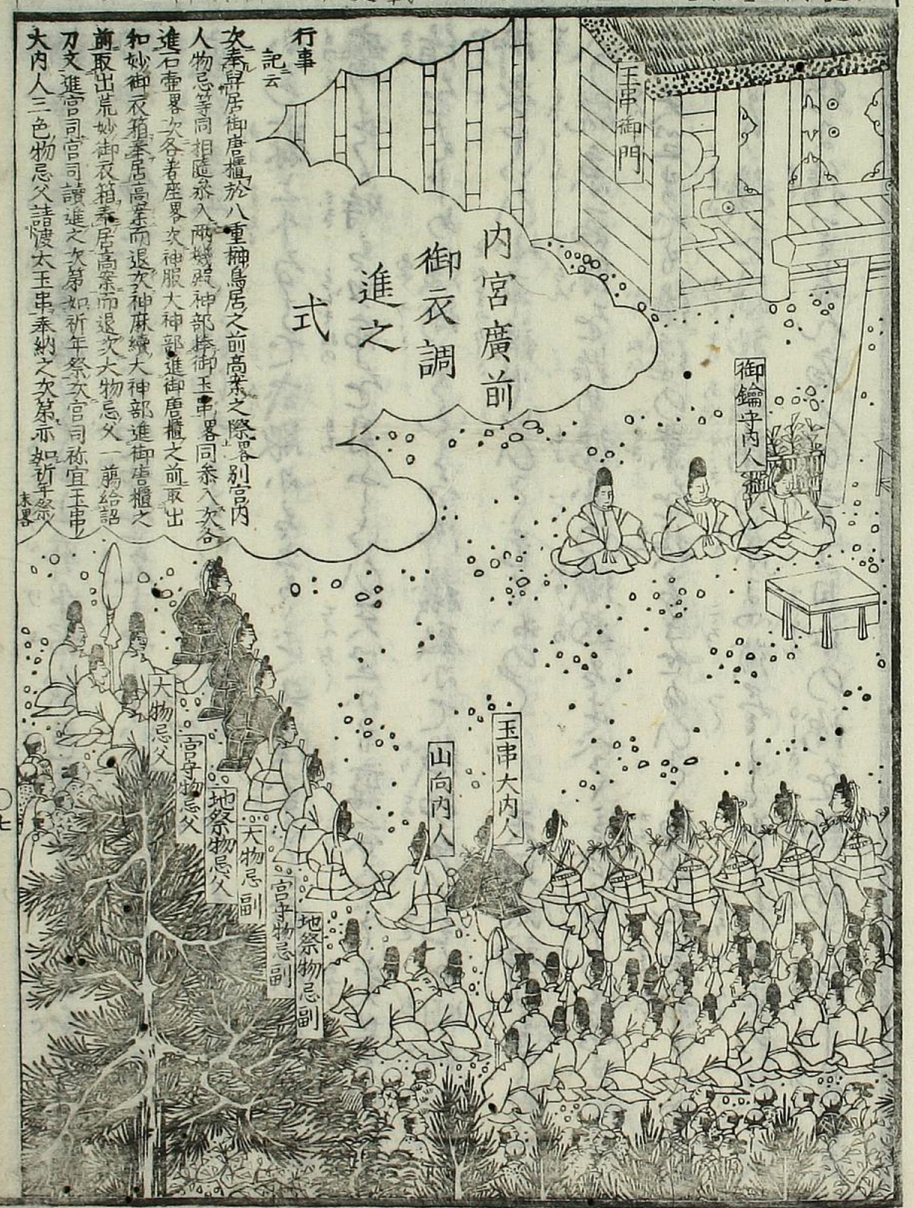
皇太神宮年中行事記云兩機殿調進之御衣御唐櫃三合一合本宮之御料神部等奉相具之祭河原祓所御唐櫃者東方上南并並之神部等者西座上南向御唐櫃次御巫内人供御酒修祓次預酒者次神部荷川頭手水次罪居御唐櫃於二鳥居之内置道之北端神部等列立其西各向南次宮司進參自一鳥居上二鳥居上次御鹽大麻先御唐櫃其次宮司其次神部等先是祢宜政所相從經中道參列進行年祭次祢宜次宮司其次御唐櫃相從承神部等各奉進於玉串行事所各列立祢宜西上南面宮司東上南面三色物忌父者祢宜列之末上西向西御唐櫃二合置於彼宮遥拜所置道之中間罪居之玉串大内人山向内人者宮司之向方東上北面兩神部者御唐櫃之南方上東向北荒祭宮滝祭宮風日祈宮之内人物忌父々妻々多妻之



久行事記服部麻續西大神部兩少神部神事供奉記延應二年服大神部豊時少神部延助麻續大神部行貞少神部弘朝公文拔弘長元年神服連公重眞元祿十二年任符服部大神部久富少神部久定麻續大神部久明少神部久種正德四年任符麻續大神部久吉服部大神部久友安永二年任符麻續大神部久殿安永九年任符服部大神部久守寛政九年任符己麻續大神部久成文化十四年任符服部大神部久顕云



自餘織女人面戸人等來由ハ古記因繫畧之總テ兩御機殿ハ從朝廷御政印ヲ下シ給ヒ猶神部ノ輩モ大政官ノ堂給ヘル丁延喜式第四卷ニ載ラル又神部職補任之樣ハ公文拔ニ見エ今猶年々奉上ノ内宮祠官交名帳ニモ各其実名ヲ載ラレタリ斯公史ノ所見事々明ナル丁偏ニ系族ノ眉目実難有ソ御キケル又此邊六十六郷ヲ今ニ御糸庄ト唱フルモ其往古御機殿ノ神知ナルノユエナリ殊此庄内ニ



行事記云

次奉舁居御唐櫃於八重榊鳥居之前尚奉之際畧別宮内人物忌等同相隨奉入兩機殿神部捧御玉串畧同奉入次各進石壺畧次各著座畧次神服大神部進御唐櫃之前取出知妙御衣箱奉居高案而退次神麻續大神部進御唐櫃之前取出荒妙御衣箱奉居高案而退次大物忌父一萬給詔刀文進宮司宮司讀進之次第如祈年祭次宮司祝宣玉串大内人二色物忌父請懐玉串奉納之次第亦如哲奉次畧

モ五章ノ所住ノ地ヲ麻績郷服部郷ト号ケテ和名抄ノ郷名ニモ見エ又倭姫命世紀ニ号麻績郷者中神麻績氏人等別居此村因以為名也トイヒ其里々ノ浦々ヲ麻績浦トテ萬葉及夫木名寄等ニ加詠多カリキ

延喜式祝詞巻ニ御衣波明妙照妙和妙荒妙ニ云

續古今太上天皇
小車のにしきまゆる神錦山まいめぐりあふ年もききふろり又新千載等ニモ小車錦ノ詠アリ

紙布と唱へ於其餘にも或ハ上布下布或ハ芭蕉布など云ふ。古にハ皆麻布の縁なきにあらざるも万の布をえらしせしいにしへの遺風しあるべし。麻布ハ正しく清浄なるものにて官服も多くハ布を用ひ武門にも麻上下にて武服なるぞかし。又漢国にも布を貴べるにや。斎する時ハ白布を用ふといひ天竺にも麻衣など着せしも如是布。絹をもはじめ綾錦をも織るハ御機殿にて織染なひしを明妙照妙の御衣ともいひ小車錦ともいひし名もあり。　天照太神にも奉らせぬふ。今既に京西陣を始め諸国の織物あまたべくなる名ハ始まりて殊さら唐天竺までも織絵の業を授けさせぬひて唐にも黄帝といふ王の時より機を織り縫染綾錦の業に心を尽しあれども和国の錦ぞ唐の錦に勝るべし。唐人の言に日本の錦を神錦と称し其数

義楚六帖ニ云大倭國貢神錦龍文風彩恰非人工云漢人ノ皇國ノ錦ヲ見テ驚ケル様自ラ知ラル又山海經ニ云東海有氷蠶其蠶五色織為文錦ト云

日本紀神代巻ニ云軻遇突智娶埴山姫生稚産霊此神頭上生蠶與桑臍中生五穀又同紀一書保食神ノ条ニ口裏含蠶便得抽絲自此始有養蠶之道云　此文儀ニテ蠶飼ノ神代ニ起レルヿヲ知ルベシ故ニ稚産靈神ハ御機殿第一ノ攝神ニ座シ

紋文といひ風彩といひ給ふ人工にあらずと賞美しあへりとなし。唐の書にみえたり。さもこそ唐にも新製の品やあまたに織出すらん。応神天皇の御宇に到りて呉織穴織など云ふ人呉国より渡つて機を織りまさし。　雄略天皇の御宇にも呉国の人来りて織し事もあり。経るに今の世の人名のみなどや日本に織物の始めなるか。忘るもあまりあるや。名は実其本を本として其末を見るにて如何にも神国を忘れて異邦を尊ぶべきこともあり。唐人さへ神錦と称するに吾神国人の其根元を失へるぞ唐人へ対しても恥かしきにあらずや。能く味ふべし。又蚕も始は天竺より渡れり或ハ唐より来たれ来しものなどいへる人もあるは訳もなき僻言なり。蚕も桑も皆神代より御機殿に記して唐天竺までも授けさせ給ひしものにてぞ

御饌神ハ即雅産霊ノ御子ニテ三狐神御食都神ト称シ第二ノ攝神ニテ座セリ神殿ハ二宇並立給ヘリ總テ御機殿ハ本宮以下攝神ノ社ニ至ルマデ悉類聚大補任等ニ載ラレ猶御造替モ往昔ハ皆公營ノ例ニテ既五百九十餘年ノ以往仁治三年内宮遷宮記ニ兩機殿事如延暦儀式帳者限六箇年可修造由被載之ト内宮祢宜ノ奏聞アリシヅ其明證又内宮嘉元遷宮記ニ神麻續機殿已下十二宇今修造トアルモ其證ナリ又文永六年九月兩機殿鎮守神殿御装束御幌並攝社御幌紡矢ノコヲ進奏セシ解狀ノ様ヲ公文筆海ニ載ラレタルモ攝社トテ私ノ鎮座ナラヌ證ニテゾアル

あきゆくまゝに吳服もまた来つゝ衣のゆきあゝ世ゆゝしき蚕飼を、
業を機織の職とする人伝聞ゆゝ御機殿の神国を跡て神罰
を蒙るこゝろうきを人々ゆゝ聞つゝ又別に蚕飼を業とするべきなり如是神代より今
まゝ無年　天照大神の御衣をなゝせのひ天下の万民織績を
授つゝ肌寒を凌ぐ御恵絹裳つゝ君なゝら蚕御機殿の御恩
をバ跡よゝ仰べきゆゝやある御ゝゝ織縫紡績をいとゝ或蚕飼
業とゝ或織幕ゝゝをバ跡ゝ御機殿の神織絹おんゝ御ゝでやゝあるべき
恩と或幕ゝゝをバ跡ゝ御機殿の神織絹おんゝ御ゝでやゝあるべき
唯士農工商何を家業とゝゝる人ゝも多肌ゝ衣なゝく叶はゝと
なゝをバ麻姫のなゝへゝ神めしゝの御愛ゝふゝくゝゆをゝめて朝夕乃
神徳ゝゝを衣恩の礼を先言べし婦人ゝ初ゝ古実のゝゝくゝ四月

九月の八日十四日ゝ業をつゝゝゝ御機殿の神霊を祭（上御機殿の神号勅諚の載あり）
（宇佐の人ゝゝ神主家より請ゝる祭）ゝてゝゝをゝ初ゝなバ爭ゝ神甚志をまゝてゝハん
女ゝゝこゝく病ひの多きゝのなゝバ医師ゝゝ恥且ゝゝもらし
がゝゝき祇園ゝゝ神ゝ祭ひ初るべし或安産の願を初ゝ或月ゝ
の不祥なゝ初ゝて其験の速なゝを見ゝく諸願の寿功をおゝひ
さゝゝべし今拾文婦の縁を初ゝまゝゝ家の嗣子を初ゝ又ハ
長寿を初ゝ家麻績をなゝゝく拾約の一なり而況此三種
ゝ御機殿の神物況麻ゝ清浄正直の織ゝゝ験ひをゝぶゝ
白髪ゝゝ孫ゝゝ賜ゝ表ゝ糸ゝ結びつゝ縁
ゝゝゝの所以なりし如ゝ子孫のゝ績ゝゝゝ功験
ゝゝ殿の神宮ゝ産ゝ代無ゝ寿を保ち孫文孫のゝゝ

旧事紀ニ稚日女尊者天照大神之妹也

神代巻ニ稚日女尊ハ織殿ニ居テ神衣ヲ織ル時ニ天照大神ノ弟素戔嗚尊ノ所行ノ狂暴ニ驚キ梭ヲ陰部ニ刺シ神ヤブレテ死ス

今は他流弐不書代々実子お續なる見る人能いたわり給へ

○まづ御機殿は婦人の守護神なるべし女の分別はまづ此

正しさ沈掛あつて既御織殿は婦人の

○稚日女命は　天照太神の御妹神なり御しるし何の御

なく唯御機殿なく御機を織らせなひしるし御足貧の　素盞嗚

して御機殿の蔓を穿て投網なる敷馬らせなひて不善を

機まを踏御まを持なる機の梭なく陰上を衝せなひしる御

神なり色等を今日人間はやひ法くらるる如き陰所の痛ひなど

つくさるなきものなるべバ月水の不揃或長血白血或湯瘡淋漓

を陰所の痛なく服なるしあらバ仮令人の耳へ入るとも

神代巻ニ天照太神之子正哉吾勝々速日天忍穂耳尊聚書皇産霊尊之女栲幡千々姫生天津彦々火瓊々杵尊ヲ

天棚機姫命ヲ七月七日ノ夜ニ祭ルヿ国史官牒ニハ未見所ナリ是ハ武下トヲル漢人ノ續日本紀ト云偽書ヲ作リテ妄言ヲ記セシヨリ事ラ世人ノ誤来レルヿ五雜俎ニ見エタレド車長ケレバ此頭書ニハ尽ガタシ故ニ旧事伝言ニ譲リテ爰ニハ省キヌ假令国史ニハ

神一の拙を紙を立てまつ御機殿は祈るべしいかなる神の祟りなる

甚験あるべしつとなし

○栲幡千々姫命は　高皇産霊命の御女なり　天照太神

の御子　天忍穂耳命　俗ニ忍穂耳二代の御林

杵命　地神二代の御母神なるまバ陰所の痛ひなど

織殿六座の甚一なるまバ陰所の相殿なるまを

を叶へさせなる御神なり

○天棚機姫命は　棚機稚竹秋日姫命とも　七夕津女命とも

なりて　伊弉諾命の御女なるまバ也　天照太神の御妹神

なりて　御織殿六座乃内なる婦人の守護神なるまる今既

七夕にて七月七日の夜天よりむかひて此御神を祭る事是

不敬トモ神ヲ祭ルニ何ノ苦シキコカアル七日ノ夜ナラストモ常々心ノ信ヲ尽シテ思フコヲバ祈ルベシサレド詰ニ云ル哥ニ

ゐるとはかりのみちの道まかりなりとも神やまもらん漢意ノ人ハ我コソ誠意ニ叶ヘリトテ神ヲ祈ル志ノ疎ナルモアルベケレド今ノ世ノ中千ニ一人モ誠ノ道ニ叶ヘル人ヤアルベキ誰人カ此返哥トテ

そらんずるこの乃ちまもるも神やも

初トして吳服までも寡人無年の例と為て、いかを高天原

よまゝくさ　天照大神の勅を奉て天香山の榊を掘て

機殿に神衣を織らせ給へる御神自ら忌び人と天の忌むひ

為まるるもさるこゝろまど抑御織殿のこゝろ和くも高天原乃

斎御機殿を遷奉りて直に其御殿を斎機殿と号御織殿とも

称し奉りて御機神云座の神霊紙為を祭る御殿なるまで

此御神への誘殿を造ぐか御機殿に移る御機殿を除

所なし天に高くのぼる為ば　天照大神に祈ありべきことを

固く張かゝ天に向むひ祈るに固じるべし其御神を思ふ

ゐて神殿を何のゆゑぞや能ひに造へくよ

○木花開耶姫命と大山祇命と御神の御如ゝく御織

[illegible]ト寛文頃

或書ニ見エタリ日本魂ノ人ハ此近哥コソ猶モ能ク味フベキコヲバガシ

天神七代地神五代トニヲハ世ニ普ク流布ノナレド實決テ無キコヲ也ナレド是モ頭書如キニ竟ガタシ先近クハ神代巻ヲ引タル爰ノ文ニ木花開耶姫命ノ瓊々杵命ヲ天神ト宣ヒ[illegible]ニテ知ルベシ[illegible]瓊々杵命ノ俗ニハ地神トヲナレハナリ

敷衣座の固かく先〳〵御機を織らせ給へる御姿の艶しきを

天照大神の御孫　瓊々杵命見初させ給ひて御製をむすびて

ゆひしに一歌ゝく妊娠のひしに出る　瓊々杵命のくのハく

色吾子よあゝ世他の子なるべし〳〵能ハせ給ひ給まバ固耶姫

為方なく云ハせ給ひく云戸室にて戸口の云さき産屋を作らし

め其固に入りてのハく君妊る子なり〳〵天神瓊々杵命をの御胤

なゝむバ君必焼亡べし〳〵弥天神の御胤なゝバ火も害ふ産ゝむと

拵ハせ給ひく則其産屋に火を放く焼しめ給ふに奇姫なる哉

炎の中に産御子三神生させ給ふ其第一を　火明命次を

火酢芹命其次を　彦火々出見命と申奉る此　大火出見命ハ

信ゝいへる地神四代の御神ゝく天下の君ゝく治らせ給ふなり

拷幡千々姫命天棚機姫命八十々姫命ハ一神ニシテ三名ナリト云ヘル説アレドモ未考其虚正確ハ豊石窓神櫛石窓神ノ如キモ日本紀及延喜式ニハ各二神トシ古事記ノミ一神二名トスルカ如是等ノコハ私ニ論ジガタシ

如是正しき霊験のまことうめるは後の世までも国耶姫をば子安神と崇まつる女の産を司る御神なり。是偏に日本紀の概を取て述給まひ男子紙を八ぎて妊娠の至らばまづ御機殿に於て其分紙に組をなりて一生じは安産を祈るべし夫の中かくさへ安らふ御子を産ぬ為あり

御神なるべし姫御神に祈まる人事ら産の憂あらんや於産守として産月は能く髪に結延宣の御守もあつ志の人も造るべし

今の世は産の多きさま人々神の御徳を請継参き神恩は生まれ

弥は産の后はかる霊験のあらふ御まは御神のあるまなぐら

猥に吳国の仏菩薩などいるをたのみ給へるいとかもあん

能く心意しまふ産さしまつる

古語拾遺云今長白羽神麻以為吉和幣即今天羽槌雄神織文布

神代巻云其所服者唯星神香々背男耳故加遣倭文神建葉槌命者則服也按ズルニ建葉槌ハ天羽槌雄ノ別名ナリ神代講述録及鳥獣神代系圖等モ亦云ヘリサレバ天羽槌雄ハ最猛キ御神ニテ座シカト罪人トテ猥ニ誅シ玉ハズ唯御徳ヲ以テ香々背男神ヲ服シメ玉フモ国ニトリテハ国ヲ治メ家ニトリテハ其

○長白羽神○天羽槌雄神此二神ハ男神にて織物の御神なり

御機神は織物の人の神遠を賜くし寿命延らせ給ふ御神なりさまば家内乃和合安全を祈て子孫の古久家業の繁栄をも望み祈るべし芝までの御神をもべく御織殿六座と

ものとなるなり

○麻績屋姫命は畏くも　天照太神の御霊を麻績くさ

上御機殿の御正殿に坐座ならせ給ひ○八千々姫命は　天棚

機姫命の御末孫なるを下御機殿の御正殿に坐座なつとくもも

婦人の吉凶神なる者　麻績太神宮にて志しなきまば

上御機殿の御正殿かも御織殿六座の御神かも通じ　服を神に

志して織ものまば下さまもく殿の御本殿御織殿ともに請させ給ふ

家ヲ治メ給ヘル御德ノ備ハリ玉フカユエニ物ノ和合安穩ヲ此御神ニ奉祈ナリ又吾祖長白羽神ヲ壽命神トスルモ元來其御德備ハリ玉ヒテ今ノ世マテモ産兒ノ臍ノ緒ヲ絢ルニ竹刀カ臍ノ緒ニ作リ用フル事神代卷木花開耶姫ノ御産ノ条ニ見エニ麻ヲ添テ祝トシ又兒ノ頭ニ麻ヲ結ビテ髮トスルモヤ十百ノ白髮ニ表ヘ又麻ニ錢ヲ繫ギテ彦帶ニ着ルモ賜ヲ持テ老ヲ歷ヨトテ富ト齡ヒヲ祝ヘルニアル唯總テノ祝事ニ麻ヲ用フルモ麻ハ長白羽神ノ神物ナルノユヱナリ實ヤ御名ノ長トスルモ子孫ノ長ク久シク白羽トスルモ頭ノ霜ニ比シ称号ニヤ神裔トテ吾輩ノ今ニ代々實子ニテ續ルモ又終ニ白髮ヲ冠ラヌ代トテモ無キハ偏ニ此神ノ恩頼ニヨルモノヨヤ

あつた御織殿ハ同じ神さを齋祭ると言天原ハ
ふくゝ麻績服部と云る二の御名も有ぐ齋機殿と云る一乃
御名のゝ有るの由有り總て御機殿ハ
を始たつた御妹神も御〳〵まさ御子御孫御彦神まで御三代の
御后妃御母神も惡く結て御〳〵まして御交有るを婚ひて婦人
實も法類稀なるゝなる御機殿を唯機神とのゝ申して婦人
の身上を守て經帛を治させる童子功の御〳〵まして紙和
らぐ一面は吳服の道は遂へるたゝ婦は家は美さ寶を持
なぐゝ吏を寶とも有で他人の石屋紙好〳〵おりふゝ
無しも吳服の力をからぜゝもあるなん面めぐゝも或病ひは
或妊娠の身ゝなゝバの信を忘してもゆく御機殿は新つた神の

御惠を蒙るべし此系圖記は御機殿の御新よりまさく今日
安樂は衣を着て居なぐゝ其御恩をも無へぞまる婦人の義
福且安產は童子功の身〳〵御恩をもゝざる人ゝの考め報國
史官牒の概を探渉ゝく聊爰は論〳〵結るのゝ

△御機殿系圖の乃ゝ山坂の爰なく能平地ゆゝく馬駕の通るまさ
乃なつた伊勢系圖の席雲坂雲岩屋の石の大名居まる入ゝくむゝの
宮道御系通就系圖へゝ考めけは其ゝバ行程初ゝく今の往還よ
つまゝ爲は通ゝ道當の丁數は合せ通るゝべて通さゝの大事を
ゝるべゝまゝ風面法ゆゝまゝ善は乃ぶ時なぐゝ神自殿へ報
まる慶ゝ又平生の仮用なぐゝゆまるべゝ

神代巻ニ云軻遇突智娶埴山姫生稚産霊此神頭上生蠶與桑臍中生五穀又同紀一書保食神ノ条ニ曰眉上生蠶口裏含蠶便得抽絲自此始有養蠶之道云云此文儀ニテ蠶飼ノ神代ニ起レルヿヲ知ルベシ故ニ稚産霊神ハ御機殿第一ノ攝神ニ座シ保食神ハ即稚産霊ノ御子ニテ三狐神（御食都神）ト称シ第二ノ攝神ニテ座セリ又天棚機姫命ノヿハ爰ニ云ルカ如シ

蠶飼の人〻心得の說

伊勢國御糸庄武河野某謹白

蠶の始りは御機殿第一の攝神 稚産霊神の御正躰より蠶と桑とを産出給ひし御織殿古座の因なり 天棚機姫命天香山に蠶飼し給へるも我朝養蠶の始なりかく御機殿の霊虫なるゆゑに殊に不浄を忌ことなれば蠶棚ちかくは常に注連を引渡し御機殿の御祠に見なし清浄にすべし若其内にあやしきもの人あるひは備忌の人ありあるひは法會の営みあり又は經を誦念佛の聲など蠶棚に近く出る時は織女の蠶の機嫌を損じ忽ちに死くもちこともあるものなり是則 太神宮御機殿の霊虫なる說ありて南をじ何る時も先竈所の火を替改め家内を塵ふかて清め御機殿を祭を備へありて一向に其過怠を償ふべし清きへかるも猶も清きを尽し神の為なりども無人ある家内まて飼ふ人も月水の火の立ざる内にもまさ服の移らぬ内にも不家業の始ともなるなきは止しなるも得ぬなりもて其生まは御機殿を浄め一向にも其しを備へありて蠶飼に取るべし其さ不浄除の許状を神家より乞ひ服に出ざる今の世佛家より出せるに随ふもの知く神罰を蒙る輩なる恐惧べきことなり今諸國蠶飼を職しある人〻遍の多き八編に神恩を憧しめあるの由なきあり常に一心に御機殿を心を尽して飼時も争ふ其過あらん故に諸國養蠶の人〻に御心得を論すものと

◎御機殿は衣服の祖神にして宮の織物を始させ給へる御神なり櫛田川と祓川とのる従来より十二川ホまて上御機殿ホまでといへるまさ生成あらざまへる大宮居より入て御むさき殿の御前を通り衣文へる事ぬけの為を御糸通と小従居より入て道

衣服を裁時心得の說

伊勢國御糸庄河野某謹白

衣を裁時は必ず麻姫の神號を唱へ 麻續太神の御恩を謝して裁べきことのよし古書に記てあらば神父は御神態を御機殿にある人〻は法の要路を遂ることの讀もなく傳へざく古實ありある讀ひあり裏にてへる初穂を中にて今諸家にては初穂といふ名のみ残て衣あるをいふあるは系ちに今諸しの心得てすべき人もあるやうにもしあへる今は織初の元日を奉る心得て古實の正しき記述もせずして法の要路を遂きんともあるにつの品ありて又は其反物のあれば御機殿に奉るべきなり初を奉りて棹を納める裁んとおりて反物の皮に揃持麻續太神にあるは由ての中て我家にてよく余じ機を立宣を承き衣服を裁ち其るべし後初まちく御機殿よろを載きてる前後の是る人で是れのづから家雷而疫の災を避まる商人職人を是べくせ衛の人等は海川途中の災なく幸て野山を歩行には精粮も是き犯もしく能はざる理あり實の他を鎮めく知りへ身ふべしさて裁ちの時布のても不残すくを元日の要は衣織て不は不捨して清浄なる家に納め置すをといふまでも御機殿に家の刻 麻續太神宮の御前に納めあるべし織元の分きさ反物にを綴に継まに二三分程切て其を御宮へ納めるしをなべしむ是で列御初穂のこつえをつくも多く奉るを御神のの根本は外へ八方の一〻經緒をも外の織物にても元日は組もしくは不残まに同じ方にようしぞ下に長くて是にも計を奉りて反ものあるとは因縁あるべし御宗に載べきてあるとも古傳のあるに初穂は奉その諸人の通ひ

[illegible]

○いつの頃よりか麻績の神宮を又掛の書と世に伝へ又神宮に書くる又掛に載さきく載人も神宮を崇つるのゆゑにさ程つまさを尺掛に書て高人法ゆさ名者もど伝のあるは書ともこを奴実に名〜ぞ高人もおく多しかく高人さ志るぬ祝場る業人牡文のこゝのて辛書に袋や褌りのまゝひく蹈つ踏ぶつもこ長こ実こ分紙あさこ伝は絵へんこ

るのく光蹈るもこしこもこゝのて読は鰐の既さ〜絵めこ〜〜〜〜は直は 麻績宮神の御紙書こ

又掛のもゞ深く絵紙竜く載さおバ虎も載る理ゆ〜む〜ゆ 紙縫ぐもりひゆ〜は

○神衣祭の日ゆ〜ゆこ伊こ浦こあぐも蔵紙陪後紙はし むゆ流ゆさ神ゆの故実正しき絵宮こ

ど今世間の風俗のごく雅紙は女ユ紙体るのこ神威ゆ実ぶうハあ〜む近き而ゆ御機殿は浦ぐく

衣思紙は〜 這さ而ゆ我家は路みぐ〜こ素く八茅の一掬も水は洗清めゆ思は堂こ机は絵へ祭ゆ

竹紙急〜こ〜ゆるべ〜 是武のこゆ引拭間神ゆは堂こ〜ゆ人の親姫こも志べ〜

○古時は総く婦人の堂ゆるものゆこ婦人ゆわさく或ひの多きの堂ゆ文はふゆさ正姫め堂

の三ゆ家ゆ書く紙香陪のゆくゆう は絶はぐも絶つちしこきこ〜ありさゆバ神ゆの志めゝんゝ

を家内を婦の親は隣家内至一町一村はふめ社高家或職人等ゆこ神間こ組合等ゆもふめゆ

我ハくゆ一日一郎代領しゆこゆ家若の官吏等神ゆの古傳の絶ゆんし紙憂へゆこゆ志ゆ人〜

つまく姫信書ゆ出領内は箱ふめゆハゆバ涙ゆ蹈ゆもゆく宮人衣恩の正路はゆまゆこゆき御機殿の田

親ゆ出ゆ〜ゆ堂ゆ〜ゆく神威日祝は輝さゆのこゆ〜治世孚天下の御祈ゆん完賢

河埜葉著御機殿号記経宣神主

添序詞俱以為昭吾御機殿之徳

猶也唐紙以此記四方頂彩故予

又加頭書跋詞而已

麻績太神宮前大神部神麻績連

天保六年春三月

○五

此外又一枚摺の御縁起もあり猶くハしくきこゝろ御機殿旧事俚言といふ書残編〻逐刻もとめ〻書林小求めて見るべし爰に唯其書の片端後いさゝか抜出せるのこゝろ俚言に屢國史官牒の明文後引く御機殿故實乃概を解き衣食住の三廟を擧て婦俗の述ひと晴さしむ且御糸庄ある名所の埋まゝ〻もの粗哥集の秀詠と著しまゝ小弁説を副て附編としせりもとゝ全部合冊他にも流布なきことのこゝろあり

真葛園藏版

製本所

伊勢津　山形屋傳右衛門
同　山形屋東助
同　雲津屋伊十郎
同松坂　深野屋利助

天保六年乙未春三月

早稲田大学図書館
011488488815